

## 実践編



鈴木伸子

子どもの素晴らしい可能性を信じて「ピグマリオン教育観とカウンセリングマインド」を主として関わることで数十年たちました。

たくさんの経験をさせてもらったことの数例を、書き留めてみることにしました。



### 【A子ちゃんは年中さん】

野菜が全く食べられず給食になると泣き叫び出します。

まずは食べることの大切さを話し、「A子ちゃんなら絶対に食べられるようになるよ。」と、話すことを毎日続け、数週間たった時、キャベツ一筋が食べられました。

クラス全員の子達が手をたたいて喜んでくれました。

嬉しくて自信をつけたA子ちゃんはキュウリも一枚・にんじんも少しずつ食べられるようになりましたが、人間不思議なことにある程度食べられるようになると我儘がでます。

見たことのないひじき等がでてくると口を噤みます。

「ああ！ひじきさんが食べて欲しいと言ってるよ。」「ほら聞えるでしょ。」

「ひじきさん嫌いていいたら、可哀想！泣いちゃうかもしれないよ。」

「A子ちゃんも嫌いて言われたら、どういう気持ちがする？」

『嫌な気持ちになる。』

「そうですね、だったらこれだけ食べてあげて。」

500円玉位の量を2対8に分け、2の方をすすめます。それでもA子ちゃんは返事をしません。

しばらく時間をおいて「ひじきさん可哀想だね、泣いているよ。聞こえませんか。」

「ねえ、みんな、泣いているの聞こえるよね。」と友達にふると、可愛いです「うん、聞こえる。」と返事をしてくれます。

「A子ちゃんなら大丈夫食べられる。」それでも返事をしません。

「じゃあいいです。2の方を食べるのが嫌なら、じゃあ全部食べて下さい。」

どちらにするか自分で決めてね。」とA子ちゃんに決めさせます。

考えた結果、2の方を指差します。約束は守ることは知っているので食べてくれます。

「やったね。A子ちゃんなら食べられると思った。」と褒めます。

残した8のひじきさんには、「残してごめんなさい。」と言わせます。

「A子ちゃんなら大丈夫、できるから。」と語り続けました。

こんな状態で半年過ぎたころ、

A子ちゃんが私の顔を見て「先生、自分でできると思うとできるようになるんだよね。」と言ってくれた時は、嬉しくて「そうよ！凄いことを知ったのね。賢い子になったね。」と、A子ちゃんをハグしていました。

偏食を克服し自信をつけたA子ちゃんは、何にでも挑戦できる子になりました。

あとはご想像の通り、元気に小学校に入学していきしました。

## 【中学2年生のS君】

彼のことは生まれたときから知っていました。

一年に2～3回は顔を合わせ、性格は優しくとても良い子に育っていました。美術だけは大好きでとても上手ですが、他の教科にはいっさい興味を持っていませんとも聞いていました。

その彼の家族とゆっくりお会いしたのが8月末でした。中学卒業したら、保育士になりたいので、私の助手にして欲しいという話でしたが、父親は「彼が必死になって何かをやっている姿を今だに見たことがない。世の中を甘く見過ぎている。がむしゃらに努力して、それでも高校に入れなければ、また考えることにしよう。」と告げました。

何とかして欲しいと頼まれ、家庭教師を引き受けることにしました。

週2回は彼の家・日曜日は我が家での勉強が10月から始まりました。

最初にS君には《幸せの5円玉》を行いました。とても素直なS君はクルクルと動きました。

「S君はこんなにできる可能性を持っているのに、どうしていろんなものに興味をもたなかったの。もったいないね。学校の教科で何が一番好きですか。」

『美術の次は数学です。』という返事だったので、数学を徹底的に二人で勉強しました。

学校で習った所を何回も何回も自分自身で理解できるまで復習しました。

「S君は幸せの5円玉があんなに回るんだから、絶対にできるようになる。」と話し続けました。

2年生の2学期の期末試験の結果は、今まで見たこともない点数だったので、嬉しかったのと、学校の先生にも「どうしたんだ、最近やるきがでてきたのか、頑張っているな。」と褒められたのも嬉しかったのでしょう。S君はやる気ができて社会も理科も英語も興味がでてきました。

春休みに宿題の本があり、3年生の最初の実力テストは、その本から出題されるといわれ、休み中は必死になって勉強し、まる暗記に近かったと思います。

その結果良い点数がとれましたが、国語だけは、幼いときから本を読んでいないし漢字を小学校で真面目に勉強してなかったもので、良い点は採れませんでした。

ですから、数学の文章問題を解くことも難しかったです。

しかし、4月の実力テストは良い点で先生もびっくりしていました。

S君は自信をつけ、しっかり勉強をはじめました。先生もやる気を認めて私学の推薦を考えてくれていました。

ところが5月の連休に気が抜けたのか、友達に誘われて耳にピアス穴を開け、休み明けに先生に見つかり（両親は気付いていなく）、即両親呼び出しになりました。

その出来事は両親から聞いていましたが、その夜本人が話し出すことを待っていました。

部屋に入っても、しばらくじっとして黙っているので、「何か話すことはない。」と尋ねました。

事実をありのまま話してくれましたが、どうしてそんなことをしたのかを尋ねました。

何も考えてなくて、友達に誘われるままにしてしまったということでした。

「先生がやってはいけませんということは、それだけの理由があるはずで、中学生がやることではないと思っています。一般社会のルールなの。そんなことがわからなかったの？」・・・「沈黙。」

「あなたは、やって良いことか悪いことかは自分で判断できる年齢になっています。」とじっく

り話しました。

「その話を先生から聞いて、両親は家に帰っても、あなたには一言も言わなかったの」と聞いた  
ら、「はい。」と答えたので、びっくりしました。

「世の中甘く見ていませんか。私の子ならこうします。父親と母親の分です」と、往復ビンタを  
させてもらいました。

これで私学の推薦は無くなり、自力で受験をしなくてはいけなくなりました。

S君にとっては良い試練だったかもしれません。

その後も断られるわけでもなく、ひたすら勉学に励む日々でした。

しかし3年生ともなると、1年生～3年生の総復習になるので、2年生の3学期のように良い成  
績はとれなくなりました。今までサボっていたぶんだけ成績は落ちていきます。

「本当に性格はいいのね。性格が良いだけで高等学校に入れなし、証明できないから、勉強  
して入るしかないね。」とよく話しました。

私学の過去5年間のテスト問題をひもとき、一生懸命勉強はしましたが、一次試験はやはり駄  
目でした。二次試験も試みましたが、当然駄目でした。

そうとう落ち込んでいるでしょうと思い、あとは公立高校の入試だけで困ったなと思い部屋を覗  
いたら、公立高校のテスト問題の載っている本を見ているではありませんか。

自分で本屋さんに行って買ってきたらしいので、「偉いね。自分で動いたんだ。」と褒めました。  
本をじっくり読んだのでしょう。私の顔を見て、最初に言った言葉が「僕の内申点では、どこの  
高校にも入れないのですね。」でした。

「それが分かったの、凄いね。今さらながらお聞きしますが、通知表はどんなでしたか。」

『美術が4であとは1が多く2がパラパラです。これを見ると、高校に入ることが難しい。』

「何を言ってるの、S君にはやればできる力があることを忘れたの、今まで頑張ったでしょう。  
最後まで諦めないでやるしかないの、やればできる。」の合い言葉で3月の入試を受けました。

やるだけのことはやりました。次は専門学校か？中学浪人か？と頭を悩ましていました。

さすがに受かるとは思っていなかったので、「受かりました。」と電話をもらったときには、ポ  
ロポロと自然に涙が出ていました。

高校に入りお役ご免になるかと思いましたが、家庭教師は続けることになりました。

私も今さらながら、高校生と一緒にすごい勉強をさせていただきました。

高校では真面目さと性格の良さをかわれ先生の受けもよく成績もよくなりました。学校の上位に  
いたらしく、推薦で大学に入ることができ、やっとお役ご免になりました。

大学生活も楽しく過ごし、嫌なことがあっても「やればできる！」と思って頑張ったそうです。  
卒業した後も保育士になったので、時々顔を見せてくれて「あんなこともあったし、こんなこと  
もあるよ。」と話してくれます。相手の気持ちや気分を理解しようとして、相手の気持ちにな  
って考えようとするカウンセリングマインドはしっかり身につけています。

## 【子どものけんかの場合】

必ず二人の言い分を聞く。

一人ずつ話を聞き、双方の意見が違っていないかを確認、

○ 違いがなかった場合

「Aちゃんごめんなさい。」「いいよ。」

「Bちゃんごめんなさい。」「いいよ。」

よかったね。仲直りできて、これから友達のことを考えようね。で終わります。

○ 二人の言い分が違っている場合

「Aちゃんがなぐった。」 「なぐってない。」

周りの子の話を聞くと、Aちゃんがなぐったことは確かな時、

『Aちゃんがなぐったんじゃないの？』 「なぐってない」

『そうなの、嘘をつく胸のここのところが痛くなるの、知ってる』 「無言・・・」

話しているときは、にこやかに話します。

『園長先生の顔を見てみて、怒っているように見えますか。』 「ううん。」

『そうよね。本当のことが知りたいだけなの。』

『Aちゃんが何も無いのになぐるはずないと園長先生は思っています。』

『やってしまったことは仕方がないの。』

『これからどうしたらいいかを考えてほしいの。それだけ。』

『園長先生の大好きなAちゃんは嘘はつかないと思っている。』 「・・・」

『どうかな。嘘をつくのだけは、やめてほしいな。』 「・・・なぐりました。」

『どおして、何があったの。』

「Bちゃんが、言うことを聞いてくれなかったから。」

『そう、その気持ちはよくわかる。でも手は出してはいけないと思うよ。』

『そう、思いませんか』 「そう、思う。」

『頭いいね、これからどうしたら良いと思います。』 「手を出さないで口で言う」

『すごいね、そんなことがわかる賢い子になったのね。』

『じゃ、Bちゃんにはどうしたら良いでしょうか。』 「あやまります。」

『どうやって、あやまったら良いかな。』 「ごめんなさい。」

『そうかなあ。何をしてしまったのか考えてみて、～～をしないからごめんなさいと言わないと、わからないと思います。』

「これから、なぐらないから、ごめんなさいと言う。」

そして相手の子のところに行ってきちんとあやませます。

どんなときでもピグマリオンマインドを忘れず、話す子に共感する。

相手を信じていることをわかってもらい、信じることを忘れないで援助する。